



日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP) 関東

文は信なり

No.32 早春号『特集・私と賛美歌』 定価 100円

発行責任者

本部代表・三浦喜代子

JCP 事務局

〒131-0043

墨田区立花 4-6-13

TEL&FAX 03-3616-8621

郵便振替 00170-0-61838

URL: <http://jcp.daa.jp>

賛美歌の今昔



主に向かつて歌え／主は輝かしくも
勝利を収められ／馬と乗り手とを海
の中に投げ込まれた／

聖書にみられる最初の賛美歌は、イスラエルの民が紅海を渡り終えた時に神にささげた感謝の歌である。タンバリンと踊りつきであった。また、詩篇は楽器を使いメロディーにのせて歌われたようである。

新約聖書には賛美の歌を歌った後、イエス様と弟子たちはゲッセマネの園に向かったと記されている。最後の晩餐は日ごろから歌い慣れた賛美歌で閉じられたのであろうか。

現在の教会の原型である初代教会でも『神を賛美し』とあり、賛美歌が歌われていたことがわかる。パウロは『詩と賛美と霊の歌を持って』と記しているが、霊の歌とは共同体の中から必然的に生まれた新しい歌ではないかと言われている。

時代は下って、教会制度が確立してくると礼拝の儀式化に伴って賛美も整っていった。教皇グレゴリウス一世はそれまでの聖歌を編集して『グレゴリオ聖歌』としてまとめ、これがローマ教会公認の聖歌になった。残念なことは、こうした賛美は礼拝中に聖歌隊が歌うだけで、一般会衆は歌え

なかつた。聖書もラテン語を知る聖職者だけのものであつた。

ルターに始まる宗教改革は賛美歌をも変えた。ルターは自らも賛美歌を作り、一般会衆も歌えるようになった。いつでもどこでも自由に聖書が読め、賛美できる新しい時代が来たのである。一般信徒たちの喜びはいかばかりであつたらう。ルターの他にも有名な賛美歌作者が多数活躍した。

イギリスでは十八世紀の初めにアイザック・ウォッツが最初の創作賛美歌を出版し、その後メソジスト運動が起り、チャールズ・ウェスレーが信仰体験を賛美歌にした。

アメリカでは清教徒が上陸して以来、イギリスの詩篇歌が使われていたが、独立戦争後は創作賛美歌が作られ歌われていった。

さて、日本の賛美歌はどのような変遷をたどつたのだろうか。一八七二年に横浜で第一回プロテスタント宣教師大会が開かれた時に、ジェームズ・バラが賛美歌の翻訳案を提示した。それが最初の賛美歌であると言われている。その後各派から賛美集が出されたが、戦後一九五四年に『讚美歌』が、五八年に『聖歌』が出版され、今に至るまで教会を中心に歌い継がれている。今、二十一世紀は、新しいジャンルの賛美も取り入れた賛美歌集がいくつも出版され、賛美歌のブームが起っている。

いざ、私たちが『主に向かつて』歌おう。

三浦喜代子記

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| P1 『賛美歌の今昔』 | P5 山本千晶 長谷川和子 土筆文香 |
| P2 『特集 私と賛美歌』 | も P6 榎 尚子 青葉亜樹子 田中明美 |
| 安東奈穂美 遠藤幸治 亀井正之 | く P7 島本耀子／『賛美歌のエピソード』 |
| P3 駒田 隆 佐藤晶子 山本披露武 | じ P8 『賛美歌のエピソード』(3篇)／ |
| P4 荒井 文 三浦喜代子 西山純子 | 編集後記／JCPのPR |

賛美しながら

安東奈穂美

初めて教会で讃美歌を歌ったのは中学一年生の時だった。歌詞が文語体だったので意味はよく理解していなかった。

幼い頃から歌が好きで、どんな曲でもまずメロディーに関心が向く。讃美歌には四つのパートがあり、譜面通りに伴奏されていた。オルガンの調べを聞くだけで清らかな気持ちになるようだった。

中高年の仲間入りをした今は、教会の聖歌隊に所属して毎週練習している。

ある特別賛美の合唱練習の時のことである。音楽主事の先生が、指導の途中、歌詞の出だしを感じえないといったおもちで語った。「幸いなるかな、我、主を得たり」

感動が込められた魂の叫びのようだった。人間関係の絡む問題で悩んでいた私に、その歌詞が強烈な印象を伴って迫ってきた。

主、とは天地の創造者である。私を愛し、イエス・キリストを世に送った方である。この方に出会って、確かに私の人生は変えられた。今も現在進行形である。

アルトパートで（幸いなるかな）と歌いながら、自分がすでもっているもののお大きさを実感した。ああ、これだけで生きるには十分だった、と。

死の病と讃美歌

遠藤幸治

医師の宣告は私には何も知らされなかった。「尿毒症になっており、これで助かった人はいないので、親戚を呼ぶように」。

兄思いの弟がテープレコーダーを持ってきてくれた。五十一年前の古いもので、テープが丸出しであった。讃美歌を吹き込み聴いていたが、激しい頭痛と嘔吐、動悸で眠れない夜が続いた。

そうした中で、イエス・キリストのご苦難を歌った讃美歌一三九番を聞きながら、私はいつしか眠ってしまった。

目を覚ました時のあの「心の平安」は今だかつて経験したことのない安らぎだった。朝の太陽の光がまぶしく窓辺を照らしていた。

ああ、なんと爽やかな朝だろう……。ふと枕元に目をやると、テープレコーダーがスイッチも切れずに一晩中、スー、スー、スー、スーと、静かな音をたてて空周りにいたのである。

この讃美歌は一晩中、死の淵をさまよう私に付き添って、見守っていてくれたのだ。今でも聴くたびに、歌うたびに、心が震え、感謝の涙が出てならない。

おそれとなやみの／せまるときにも／十字架はやすげき／よろこび満てり／。

私の賛美の履歴書

亀井正之

讃美歌を語ることは、私の一生を語るような気がする。キリスト教との関わりも讃美歌から始まったと思う。

初めて教会に行ったのは中学時代であったが、すぐに聖歌隊に入るように言われた。

小学生の時から音楽はきらいだったので、聖歌を歌うのも当然のようにできなかった。聖歌隊は四部合唱で最も音が変化しない最低音部を歌うことになった。苦勞して音を合わせ少しは歌えると思ったとき、「この方でもできるのだから」と言われた時さすがに私もへこんだ。徐々に歌うのが好きになって、メロ

ディを歌うのを憧れるようになった。下手の何のと言われても、讃美歌を歌うのが好きになったのは不思議であった。どんな讃美歌も歌うときとても良い気持ちになった。そのメロディと歌詞は、私を励まして私の心に確実に良い影響を与えてくれたと思う。

讃美歌の信仰が私の心が沈んでいるとき励ましてくれた。その詩とメロディが私にイエス・キリストを教えてくれた。神様の素晴らしさを教えてくれた。

私の賛美のパートは、ベースから憧れのメロディパートへと指定されるようになったのは七十歳になったときであった。

私の賛美のパートは、ベースから憧れのメロディパートへと指定されるようになったのは七十歳になったときであった。

消えた讃美歌

駒田 隆

讃美歌にもまた、一般の歌と同じように、時代と共に消えていく歌があります。そんな歌の一つに、『讃美歌21』から消えた、「深い川を超えて」（『讃美歌第二編』一七五）があります。この歌は、キリスト教の讃美歌と自分たちの音楽をミックスした黒人霊歌として知られていました。

「深い川を超えて さあ行こうよ」と始まるこの歌には、奴隷として過酷な労働を強いられていた黒人たちの未来へ向けた希望が、歌われています。ヨルダン川を超えれば、そこにイエスのおられる天国がある、彼らにとっては、そこが過酷な労働から逃れられる場所だったのです。

みめぐみの主の救いと平和を／友よ、さあうけようよ／と彼らは歌いました。わたしは、この歌を聞かされた時に、励まされました。今の苦しきは、天国へ入る一過程なのだ、と。

讃美歌集の編集には、その時々の方があり、ある時は、それは讃美歌になり、ある時には、外されることもあるでしょう。しかし、心に焼きついた歌は、歌集にあるうがなかるうが関係ありません。それは、わたしにとって、あなたにとって、時代を超えてある、主による救いの歌なのです。

讃美歌は信仰告白

佐藤晶子

私が讃美歌を好きになったのは、ある日の礼拝で歌われた讃美歌の歌詞に心を奪われたからだ。

それまで人生の先輩方の助言などがありがたく受けて潤ってはいしたが、自分の堅い殻を打ち破って自分の気持ちを率直に述べる勇気がなかったため、自分の歩むべき道を見い出せずに悶々とした日々を送っていた。

教会へ導かれて礼拝に出席するようになってからも、そのような私の生活態度はなかなか変わらなかった。両親は私の姿に希望を持てなかったに違いない。礼拝で牧師が語るイエス様の十字架のお話や罪という言葉の意味を、私の中では単なる教養としてしか受け取れなかったのだと思う。

しかし、その礼拝の時に歌われた讃美歌に私は釘づけになった。私も声を出して一緒に歌っていたが、歌っている間に涙が溢れ、自分の罪の深さとイエス様の愛に気づかされた。一度は死にし身も／主によりて今生きぬ

御栄えの輝きに／罪の雲消えにけり

（讃美歌五三二番）

讃美歌を歌うとは、イエス様は私の救い主ですと信仰告白すること。礼拝で讃美歌をオカリナで演奏する時も、歌詞を大切にしたい。

散歩の時にも讃美を

山本披露武

子供のころに習った唱歌や童謡、青春時代に覚えた道遥歌などを歌いながら散歩をしていると、心が解放されて明るい気持ちになってくる。といっても、讃美歌を歌っている時に覚えるような、心の底から湧きあがってくるほどの喜びや感動はない。

今ここで、讃美歌が歌えたら……。散歩をしながら、何度も思ったことがある。けれども、楽譜がよめない悲しさ、とても無理である。そう思って、あきらめていた。

が、ある日、それでも、一つや二つは歌える讃美歌があるかもしれない。そう思って、調べて驚いた。あるわ、あるわ。歌詞を見ただけでメロディーが浮かんでくる讃美歌が四十も五十もあるのだ。

「みどりもふかき若葉のさと」と歌っていると、心が清められてくる讃美歌一二三番。「たてよいざたて主のつわもの」と歌っていると、勇気と力がみなぎってくる同三八〇番。「ひとは棄つれどきみはず」と、悩みある者に慰めを与えてくれる同じく五二二番等々。

私はこれらの讃美歌に印をつけていきながら思った。これを写して散歩の時にも歌おうと。そう思っただけで嬉しくなると、心の底から喜びが湧きあがってくるのだ。



最期の歌

荒井 文

母は胎児八か月の私をこの世に残し、天国へ旅立ちました。母は、私のために一粒の麦となってくれました。

母は、神様に私を頼む気持ちで讃美歌を口ずさみながら旅立ったそうです。このことを祖母から聞かされたときは驚きました。

その賛美とは讃美歌五一九番です。

わがきみイエスよ／うき世のふなじ／

夜も日もやすく／みちびきたまえ／

主よ／主よ／あらしになやむ／

この身をつねに／みちびきたまえ

祖母はこの母の証しを私に伝えるまでは生かされたいと願ひ、八五歳まで祈りつつ頑張ってきたのでした。私に伝えて二年後、娘の待つ天国へ帰りました。

他家に養女とされた私ですが、幸いにしてキリスト教主義の学校を卒業しましたので、キリストの犠牲の愛を理解して信仰を持ちました。

信仰を持つきっかけとなったのがこの讃美歌です。母とも思える歌です。

最期のときに母にこの歌をうたわせてくださった神の恵みに感謝してやみません。
ハレルヤ！アーメン

盲目の賛美歌詩人

三浦喜代子

三つ、四つの愛唱の賛美歌を見て意外なことに気が付いた。作詞者が同じなのだ。その名はファニー・クロスビー。強い親しみを感じた。特に讃美歌五二九番の一節は試練の日の体験が重なって、歌うたびに涙があふれてくる。私の葬儀の歌と決めている。

胸の波おさまり／心いと静けし／

我もなく世もなく／ただ主のみいませり／

ファニーは生後わずか六週間で治療ミスのために視力を失った。

母は文学を、祖母は自然界の美と信仰を熱心に伝えた。それがファニーの並外れて豊かな感受性を刺激した。八歳で詩作を始めた。詩は流行歌になって世に歌われ名声を博したが、ファニーの魂は渴いていた。

ある伝道集会でワッツの讃美歌を聞いたとき「天の光りが洪水のようにみちあふれた」を経験をした。有名な「十一月体験」と呼ぶ。四四歳から賛美歌の作詞をするようになり、九四歳で召されるまで八千曲も作った。

しかし、苦難は連続した。ひとり子を二歳で病死させた。詩が書けなくなった。七八歳で夫と離別。盲目の老詩人の有名税はあまりに高かった。しかしファニーは宣教師になりたいほど伝道の情熱にあふれていたという。

おおしく忍び耐えよ

西山純子

K氏と初めてお眼にかかったのは、二十数年まえになるだろうか。既に中高年になられていたが、その姿は若々しく活気にあふれていた。背筋の伸びた長身な人に多い長い脚と敏速に歩かれる特徴もお持ちだった。

教会の聖書研究祈祷会の折、彼は種々の聖書研究書をお読みのようで、質疑の時間には牧師が「まあ、まあ」と制されるほど矢継ぎ早に意見も交えて質問をされた。

そのK氏が検査入院を頻繁にされるようになったのは、病名が不明なまま、かなり状態が悪化された頃であった。K氏の夫人に乞われるままに、私は友人と二人で入院中の彼を繁々見舞った。

ベッドから起き上がると彼は、相変わらず朗々とした声で、「パウロはこう言っています」と、熱い口調で話された。

「私の葬儀の折には、これをぜひ讃美してください」と讃美歌を開いて言い遺すことも忘れなかった。遺言通り、私たちは堂々と天国に旅立った彼を憶えて歌った。

讃美歌二九八番シヴェリユウス作交響詩フインランディアより／やすかれ／わがこころよ／主イエスはともにいます／いたみも苦しみを／おおしく忍び耐えよ。

温もりの広がり

山本千晶

私には、日曜日の礼拝とは別に毎週、讚美歌を歌う場所があります。地域で讚美歌を歌いたい方が集まる活動です。

先日の練習日のことです。前夜の予報通り朝からみぞれ交じりになりました。「こんな天気で参加される方いらっしゃるかしら、もしかしたら私一人だけかもしれない……」

会場に到着した私は窓の外にちらちらと舞う雪を眺めながら時間を待ちました。

開始時間にはお二人の方がいらしてました。「よくお出かけくださいました」「家でじつとしていられるより歌いたいですもの」「まあ、うれしいお言葉」。

私達の会話が終わらないうちに続々とメンバーの方が到着。「なんとか、来ました」「あらあ、全員来ているんじゃない」。みるみる会場が賑わい始めました。そこに、恥ずかしそうに立っていらつしやる方の姿がありました。「今日から参加させてください」。新しくメンバーが増えました。それもお二人も。結局、この日の練習は欠席者なし、全員参加でした。わが魂の慕いまつる／イエス君の麗しさよ いっしょに歌ったいつもの讚美歌です。いつもの場所ですが、この日ならではの温もりが広がりました。

主のまなざし

長谷川和子

一番好きな讚美歌は二篇一九五番であるが、先日礼拝の中で讚美歌二四三番が歌われた。久し振りの歌に懐かしさが込み上げてきた。

ああ主のひとみ／まなざしよ／三たびわが主を／いなみたる／よわきペテロを／かえりみて／うたがうトマスにも／み傷しめして信ぜよと／

歌いながらこの讚美歌にはドラマ性があると思つた。何回も歌つてはいるが初めて、そう気付かされたのである。

主を称え、自然を讚美する歌が多い中で、この二四三番は一つの物語りになっていると思えた。

私の処女作『一番いいものを』の中の主人公が嵐の夜「カツ子、我を見よ、我はイエスなり」と声をかけられ「イエスさまなら外国人だべ、目は青いか」と問い、後年「トマスは手の傷あとを見なければ信じないと言つた。何と私は愚か者かトマスより悪い」と悔いる場面がある。

この歌を噛みしめながら歌うと、信じ切れない私たちへの苦言でありながら「信ぜよ」「友よかえれ」という主の優しさが滲み出ているのがわかる。

子供向けの物語が描けそうに思えた。

うるわしき朝も

土筆文香

わたしは生まれてから十八歳になるまでキリスト教に触れたことがないと思つていた。ところが、四歳から触れていたのだ。幼稚園で初めて覚えた歌が讚美歌だった。

うるわしき朝も／しずかなる夜も／食べ物着物を／くださる神様／(教会福音讚美歌五〇〇)。朝礼で毎日うたっていたその曲が讚美歌だと知つたのは、ずつと後になってからだ。幼稚園でお祈りした覚えも聖書の話も聞いた覚えもない。キリスト教の幼稚園ではなかったはずなのになぜ讚美歌をうたっていたのだろうか……。

後に、園長先生のお母さまがクリスチャンだったことがわかつた。お婆ちゃん先生と呼ばれていた小柄な着物姿の先生だ。姿勢を正し、大きな口を開けてきれいな声でうたつておられた。

うるわしき朝も、どんな朝なんだろう。食べ物や着るものをくださる神様も、どんな方なんだろうと、子ども心に思っていた。

『生れてからずっと食べ物、着物を与え続けてくださる神様がおられる』素直にそう思えたのは、この歌が心にしみ込んでいたからではないだろうか。天国でお婆ちゃん先生に会ったら、ありがとうと言いたい。

母子の讚美

榎 尚子

音痴だから人前では歌いたくないと言っていた母だったが、讚美歌だけは別だった。

晩年、母と一緒によく讚美歌メドレーをした。物忘れが激しくなり今あったことはほとんど覚えていない母だったが、主の祈りと讚美歌だけは別だった。私が歌い出すとすぐ一緒に声声を合わせた。

どんな時も最初は『あまつましみず』だった。声張り上げて歌うその讚美歌は母の心の中で一枚の絵になっていたに違いない。天つ国から流れてくる水によって命をいただいた若い日、苦難の中でも生きる力を注いでくれた水。きれいに歌うこともパートに分かれて歌うこともできない母と娘だったが、讚美の喜びをたくさんいただいた。

最晩年の頃、もう点滴だけが頼りの日々、それすらも体が受け付けなくなっていた。水分がなくなってきた母の枕辺で「神様、あまつましみずを与えてください」と私は何度祈ったことだろう。讚美歌二一七番がそのまま祈りとなった。若いころ永遠の命の恵みをいただいた母は最後の最後まで「あまつましみず」を求めているのだ。神様は生涯を支える讚美歌に出会わせてくださった。



初めての伝道

青葉亜樹子

小学生の時、同じクラスにいつも一人でいる女の子がいた。

教会学校へ通っていた私は、教会のクリスマス会に誘った。

「教会ってどんな所？」という問いにうまく説明することができない私だったが。

クリスマス会後も彼女は教会を気に入って来て、私はいっしょに教会へ行けることがうれしくてたまらなかった。

教会の帰り道、学校の帰り道に教会学校で教わった数々の賛美歌を二人で歌いながら歩いた。二人だけの共通の秘密ができたようで、それもまたうれしかったのだ。

ある土曜日の帰り道に、いつもの様に「明日、教会いくでしょ？」と彼女に尋ねた。しかし彼女からは「うーん」という返事しかなかった。その日は私が賛美歌してもいっしょに歌わないのだ。「どうしたの？何かあった？」と聞くと、「お母さんに、もう教会へ行つてはいけないって言われたの。親戚の叔父さんがS学会なので、もうその歌も歌つたらだめだつて……」

お家でも賛美歌を歌っていてくれていたんだという思いとともに、ぽっかりと心に穴が空いてしまった。春の初めの帰り道だった。

暖かい手

田中明美

二〇〇八年二月に横浜転勤となり、引っ越してまもなく夫が盲腸炎で入院しました。私は電車、バスを乗り継いで遠くの病院まで通わねばなりませんでした。

新しい土地での生活と毎日の病院通いで、私はホトホト疲れ果ててしまいました。

次聖日、礼拝に行く気力もなくなっていた私は、近くの教会の礼拝に出かけました。

われ主に／従いまつらん／いかなることありとも／（インマヌエル讚美歌三六一番）

私は、富山の母教会に帰つたような懐かしさで涙が溢れて歌い続ける事ができませんでした。これまでの自分の生き方がよみがえり涙は嗚咽に変わりました。

すると私の背中をさすってくれる暖かい手を感じたのです。

あつ、イエス様

背中の手は年配の神学生でした。もう大丈夫ですと言っても、その手を長い間離されませんでした。

数日後、夫は退院を早めて帰宅しました。

夫は、自分は聖書のアガペーの生き方ではなかった、これからは二人してアガペーに生きて行こうと話しました。私達はこの教会に転会し多くのお交わりとお恵みを頂きました。

美しい世界が見える

島本耀子

幼い時から視力を失ったレイ子さんは、家族の愛に育まれ、まっすぐな魂を持つ人となった。親しい人たちは、飾らぬ言葉で真実を伝えようと気を遣う。他人の言葉を鏡として、心の目で見て考える彼女に、いい加減なことはい言えない。「見える」という驕りのない彼女は、素直に神様の教えを信じた。

彼女が好きな讃美歌九〇番は、ここもかみの／みくになれば／あめつち御歌を／うたいかわし／に続き、主の創造の御業を讃える。

確かな耳を持ち、音と感覚の世界に生きる彼女は、鳥の鳴き声、花の香り、吹く風の微かな気配にも、神の息吹を感じたに違いない。

朗読ボランティアと利用者としての出会いだったが、私がその後クリスチャンになってからは信仰の友となった。そして、彼女には汚れたものを見せたくない。主の創造の恵みの中で生きていて欲しいと願い、讃美歌九〇番は私の折々の愛唱歌となった。

世の一人一人が真実の神様を信じ、平安な魂を持つものとなったら、世界は平和になる。

主のみむねの／ややに成りて／
あめつち遂には／一つとならん／。

その時はいつ来るのだろうか。何百年、何千年かかるのか。私は神様の時を待ちたい。

『わずらわしき世を』讃美歌三一九 横岡子

祈りの讃美歌として親しまれてきたこの詩の作者は明治時代に宣教師として活躍したブラウン宣教師の母フィービ・ブラウン（一七八三―一八六九）である。彼女は二歳の時孤児となり、やがてペンキ職人の妻となって各地を転々とした。貧しい生活の中で幼い子供達と病気の妹を抱え、静かに祈る場所をさがす信仰のあつい人だった。とある大庭園の傍らで木や草花の香りを嗅ぎながら神と自然とに交わるひと時を大切にしていたという。

彼女の息子ブラウンから教えを受けた植村正久は、この詩を訳して『女学雑誌』に掲載し、後『新撰讃美歌』に採録した。

ゆふぐれしづかに／いのりせんとて／
よのわづらひより／しばしのがる／

やがてこの詩は島崎藤村に受け継がれた。藤村の『逃げ水』若菜集はこのパロディ。

ゆうぐれ志づかに／ゆめみんとて／
よのわづらひより／志ばしのがる／

藤村の小説『春』、相馬黒光『黙移』にもこの讃美歌が引用されている。

ブラウン夫人の生涯は艱難貧苦の中にあつたとされるが、明治の伝道者を通して日本の若者に、文学にとしづくのようになみわたっていった。現行訳は植村訳を少し改めたもの。

『いつくしみ深き友なるイエスは』 西山純子

この歌を作詞したのはアイルランド人ジョセフ・スクライヴェン（一八一九―一八八六）。二十五歳の時にカナダに移住し、学校で教鞭を取った。プリスマ・ブレズン派に属して一生を不幸な人や貧しい人への奉仕活動に捧げた。闘病生活をしていた母を慰めるため、また婚約者を病氣、事故で失った絶望の中でも、イエスを信頼する気持を失わずに祈り紡がれた詩と言われている。

讃美歌 エピソード

一、いつくしみ深き／友なるイエスは／
罪とが憂いを／とり去りたもう／
こころの嘆きを／包まず述べて／
などかは下ろさぬ／負える重荷を／
三、いつくしみ深き／友なるイエスは／
かわらぬ愛もて／導きたもう／
世の友われらを／棄て去るときも／
祈りにこたえて／労わりたまわん／
(讃美歌三二二番)

この讃美歌は教会での結婚式や葬儀でも愛唱されるばかりでなく、一般の人々にも「星の世界」などの歌詞で親しまれている。チャールズ・コンヴァースによる美しい曲も歌詞に相応しく、歌い継がれている。

讚美歌エピソード

『アメイジング・グレイス』 土筆文香

おどろくばかりの／恵みなりき／この身の
けがれを／しれるわれに／ 聖歌二二九の歌
詞です。日本語では歌詞の意味が十分表現さ
れていませんので、英語の歌詞も紹介します。

Amazing grace how sweet the sound
That saved a wretch like me

Once was lost but now am found / Was
blind but now I see

作詞者はジョン・ニュートンです。彼の
母親はクリスチャンでしたが、ジョンが七
歳のとき病気で天に召されてしまいました。
大人になったジョンは「奴隷貿易」に手を
染め、黒人に対してひどい扱いをし、荒ん
だ生活をしていました。

ある日ジョンの乗った船が大きな嵐に遭
い、死に直面しました。そのとき初めて神
に祈り、助けを求めました。奇跡的に助か
ったとき、神の存在を確信し、今までの自分
の行動を心から悔い改めました。

子どものころ母から神様の話を聞き、祈ら
れたことが心に刻まれていたのでしょう。

その後ジョンは牧師になり、救われた喜び、
驚くばかりの神の恵みを人々に語り、『アメイ
ジング・グレイス』を書き表しました。



編集後記

★人の魂を激しく揺さぶるものに『聖書』のこ
とばと共に「賛美歌」があります。ふと、通り
かかった教会から聞こえてくる賛美歌に惹か
れてクリスチャンになった人は数知れません。
今号は『私と賛美歌』を特集しました。また、
賛美歌にまつわる感動のエピソードを拾い出
してみました。

過日、脳出血の重い後遺症のため、自力では
身動き一つできないベッド生活の方をお見舞
したときのことです。耳元で名を呼び話しかけ
ると、かすかに唇が動くことがありました。と
ころが、数名で『いつくしみ深き』を歌いだし
ますと、顔が紅潮し、頬が動き、目がしばたき、
口元が大きく開きました。喜びに包まれて歌っ
ているのがはつきりとわかり、全員が感動し涙
にあふれました。改めて賛美の力の大きさを知
ったことでした。

『主は賛美の中に住まわれる』(K・M) ★

★キリスト教迫害の戦前でも、姉たちは賛美歌
のメロディーを女学生唱歌などで歌っていま
した。祈り、説教、賛美は礼拝の二本柱ですが、
初めて聞く歌でも、自然に人々と声を合わせて
歌っている。そんな経験を多くの人がしていま
す。いつでもどこでも、神様をほめたたえ、感
謝し、みんなで歌いましょう。(Y・S) ★

日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)の自己紹介

起源は、1952年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家た
ちが立ち上げました。その後1963年に満江巖氏を中心に現在の名前に改名し、広
く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在
に至っています。

活動は3つのブロックで行っています。★関東ブロック(関東以北の地域)★中部
ブロック(名古屋周辺地域)★関西ブロック(大阪周辺と西の地域)です。

活動内容は各ブロックが自主的に進めています。それぞれに隔年で作品集を出版し
ています。昨年は関東が『春夏秋冬』、関西が『種を蒔く』を発行しました。またWeb
上にホームページを開いています。(URL <http://jcp.daa.jp>)

◎「あかし文章」に関心のある方はこの誌のトップ頁、またはHPのアドレスをご活
用ください。関東は奇数隔月に例会を開いて集まっています。案内はHPに掲載しま